

浅妻船

長唄 全詞章

杵屋佐吉 述

本名題「浪枕月浅妻」

変化舞踊「月雪花名残文台」の一

〔三下り〕 漣さざなみや八十やその湊みなとに吹く風かぜの、身みにしみ初そむる比叡ひえ風おろし、千船ちふね百船もふね艦とを立てて、入るや岸根きしねの柳陰やなぎかげ

此この寝ぬる

浅妻船あさづまぶねの浅あさからぬ契ちぎりの昔驪山宮むかしりざんきゆう、そも鞆鼓かつこの始はじりは、鞆鞆国まつかつこくより伝つたへ来きて、唐たうの明皇愛めいくわうめで給たまひ〔口説き〕 そりや言いはいでも済すまうぞへ、すまぬ口説くぜつの言掛いひがり、背せ中なか合あせの床とこの山やま、

此方向こちむかせて引寄ひきよせて、つめつて見みても漕こぐ船ふねの

あだ仇あだしあだ波浮なみう気はきづら、誰たれに契ちぎりをかはして色いろを、かへて日影ひかげに朝顔あさがほの、花はなの桂かつらの寝乱ねみだれし枕まくら恥はづかし

辛気しんきでならぬへ

筑摩祭つくまつりの神かみさんも、何故なぜに男をとこはそれなりに

冲津嶋山おきつしまやまよる波なみの、寄よせては返かへす袖そでの上うへ、露散つゆちる蘆あしの花心はなごころ

月待つきまちと其その約束やくそくの宵よひの月つき、高たかくなるまで待またせて置おいて、独ひとり袂たもとの移うつり香がを、

片破月かたわれづきとたのためても、水みづの月影つきかげ流ながれ行ゆく、末すえは雲間くもまに三み日の月つき

恋こひは曲者くせもの忍しのぶ夜よの

軒のきの月影つきかげかくれても、あまる思おもひの色いろみせて、秋あきの虫むしの音ね冴さへ渡わたり

閨ねやの月つきさへ枕まくらにかよふ、鈴すずもりりん振ふりつづみ、しほらしや

弓ゆみの影かげかと驚おどろきし鳥とりは池辺ちへんの木きに宿やどし、魚うをは月下げつかの浪なみに伏ふす、其その秋あきの夜よも今いまは早はや、鐘かねも

聞きこえて明方あけがたの、入いるさの月つきの影惜かげをしき、月つきの名残なごりや惜をしむらん